

児童虐待初の20万件超

18歳未満の子どもへの児童虐待は、30年連続で増え続け、2020年度は過去最多の20万5029件になった。20万件を超えたのは初めて。前年度より5・8%（1万1249件）多くなった。厚生労働省が27日、全国の児童相談所（児相）が相談対応した件数を公表した。虐待のタイプ別では「心理的虐待」が12万1325件（59・2%）で最も多かった。新型コロナウイルスの感

染拡大による自粛で、親子ともが自宅で過ごす時間が長くなり、児童虐待の増加を懸念する声もあったが、前年度比の増加幅は18年度（19・5%増）、19年度（21・2%）を下回った。厚生労働省は「感染状況との関連性はみられない」（担当者）と分析する。

部屋に一人…空腹でティッシュを食べて

行政の手が届かず、虐待から逃れられないまま、心に傷を負い、大人になる子どもたちがいる。

また、おなかが鳴る。もう何日も食べていない。ティッシュなら、こたつの上にあった。冷蔵庫から取り出したマヨネーズをつけ、食べる。ティッシュ自体は味がしない。全部はのみ込めず、はき出した。

大阪市の中村舞斗さん（32）は当時14歳。中学3年生のクリスマス前の頃だった。2人で暮らす母親が、家に帰ってこない日が続いていた。一人きりの自宅に

食べ物はなくなっていた。母とのふたり暮らしは、「ネグレクト（育児放棄）」と呼ばれるものだった。だが、その前から、同居していた祖母やおばから身体的虐待を受けていた。祖母からの虐待は、中村さんが3歳のころから。祖母は中村さんを叱るとき、「罰や」と言って仏壇の口ウソクを足の裏にたらしめた。小学校や中学校の先生が家庭訪問をすると、暴力はひどくなった。

中学3年生まで耐えた。やっと助けを求めたのが母だった。一緒に家を出てく

れたが、今度はネグレクトが待っていた。児相の関わりは、高校生になってから。その後、中村さんは精神科病院に入院した。18歳で退院したが、児童養護施設は原則18歳までが対象で、行き場にならなかった。結局、母親とまた暮らししかなかった。厚生労働省によると、虐待された子どもの9割強は「在宅支援」となり、自宅で親などと暮らし続ける。19年度のデータでは、児相が対応した児童虐待件数が19万件あまり。これに対し、児童養護施設に入所したのは2595件と、施設に入所するのは一握りだ。虐待を受ける環境で暮らしざるをえず、トラウマを抱える人もいる。中村さん自身、23歳から治療を受ける。自分と同じように心に傷を負った人を支援するため、中村さんは昨年4月に「虐待どっとネット」を立ち上げた。「虐待を受けている子どもの大半は自宅にいる。心理の専門職が訪問し、親のケアをするなどして、家庭全体を支援していく取り組みが虐待を防ぐことにつながる」と、中村さんは話す。（久永隆一）